

科目間連携を視野に入れた家庭科教材制作 —日本の歴史を取り上げて—

A18AB045 木村朱里

1. はじめに

中学校や高等学校の教科目において家庭科は、受験科目ではないため国語、社会、数学、理科、英語の主要教科から切り離されて取り扱われているのが現状である。しかし、平成29年改訂新学習指導要領では、教育課程全体を通じて、教科横断的な視点から教育活動の改善を行っていくことが求められており、科目間連携を図るべきとされている。

家庭科における被服分野での科目間連携を考えるにあたり、日本の伝統的な衣服である和服と日本史との関係が考えられる。和服は、各時代や歴史的背景、生活様式などによってその形状や着装方法はかなり異なっていると言える。しかし現在の日本では、細かい形態や着装を知らず、和服として一括りにされているのが現状である。

そこで、本研究では各時代で永きにわたって着用され、歴史的背景によって変化してきた「小袖」を取り上げ、日本の歴史とつなげていくための教材として小袖の制作をすることとした。なお、これらの連携は、家庭科と日本史との総合的な深い学びへと発展させることができる機会となると考える。

2. 学校教育の現状調査

2-1 家庭科教育

中学校、高等学校で使用されている教科書の中で、日本の伝統衣服や文化についての掲載量を調査した結果、家庭科で学ぶ和服や日本の伝統については、継承していくべき知識や技術であり、採択量の少なさは問題点であると考えられる。以下の表1から表3に調査した教科書を抜粋して示す。

表1 中学校

出版社	教科書名	ページ数
東京書籍	新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して	4ページ
教育図書	技術・家庭 家庭分野 くらしを創造する	1ページ
開隆堂	技術・家庭 家庭分野 生活の土台 自立と共生	4ページ

表2 家庭基礎

出版社	教科書名	ページ数
東京書籍	家庭基礎 自立・共生・創造	2ページ
教育図書	新家庭基礎 今を学び 未来を描き 暮らしをつくる	2ページ
開隆堂	家庭基礎 明日の未来を築く	なし
実教出版	新家庭基礎 パートナーシップでつくる未来	なし
第一学習社	家庭基礎 ともに生きる・持続可能な未来をつくる	1ページ
大修館書店	未来をつくる新高校家庭基礎	なし

表3 家庭総合

出版社	教科書名	ページ数
東京書籍	家庭総合 自立・共生・創造	5ページ
教育図書	新家庭総合 今を学び 未来を描き 暮らしをつくる	3ページ
開隆堂	家庭総合 明日の未来を築く	1ページ
実教出版	新家庭総合 パートナーシップでつくる未来	なし
第一学習社	家庭総合 ともに生きる・持続可能な未来をつくる	3ページ
大修館書店	新家庭総合 主体的に人生をつくる	なし

2-2 日本史教育

高等学校の日本史の教科書に掲載された和服の写真について調査したところ、実教出版の日本史Bは4件、浜島書店の新詳日本史は7件であった。また、和服の掲載写真も、説明がないものが多かった。しかし、日本の歴史と和服には相互関係があり、生活様式が深く関わっているからこそ、連携が必要であると考えられる。

3. 小袖について

小袖は、袖口が掌が通るほどしか開いていない衣服の総称である。小袖の一種である筒袖の衣服は、古墳時代から奈良時代にかけて貴賤を問わず着用されていたものであり、その機能性から庶民の間で着用され続け、平安時代では男女とも小袖形式のものが中心になった。貴族たちは防寒用として最も下に着用するようになり、小袖が武家社会を経て表に出てくるようになった一方で、庶民の経済力の向上に伴って小袖の地位が向上し近世の小袖文化を生んだ。

鎌倉時代末期からは、小袖が表面化し重要な役割を担い、1枚だけでも服飾表現が可能になった。袴を省き小袖を重ねて着用し、最も外に豪華な小袖が打掛けられた打掛姿、打掛けた小袖の肩をはずして脱ぎ、帯にはさんで腰に巻く腰巻姿は、室町時代の武家装束の礼装となった。

安土桃山時代以降は、男女ともに現在のきものの原形である小袖が中心的衣服となり、さまざまな染色技法による多様な意匠が試みられ、江戸時代にはつぎつぎと新しい流行が生まれた。



図1-1 通常正装の武家婦人



図1-2 打掛姿の武家婦人



図1-3 腰巻姿の武家婦人

出典：日本服飾史HP、風俗博物館HP

4. 日本の歴史からの小袖について

4-1 平安時代後期～鎌倉時代

古墳時代から着用された筒袖が平安時代では一般的になり小袖として登場した。背景に、寒さに無防備な造りの寝殿造が小袖を装束の一番下に防寒着として着用したことや、貴族政権から武家政権に移行したことにより、武家の服装が正装になっていったことが関連すると思われる。

4-2 南北朝～室町～安土桃山時代

小袖が表面化し1枚だけで服飾表現が可能となり、小袖を重ねて帯を締めた上に小袖形の打掛をはおる形式や、小袖を着用した上に小袖形の腰巻を腰のまわりに巻き付ける形式が登場し始めた。背景に、足利義満の金閣や北山文化が繋がっており、優美で華やかな文化により小袖も豪華になったと推察される。

4-3 江戸時代

初期の頃の形は、身幅が広く、袖幅が狭く、袖口が小さく、おはしよりなしで対丈に着用し、細い帯をしめる姿が特徴である。

17世紀半ば以降は、身幅が狭く袖幅が広い形から身幅と袖幅の比が1:1となり、女物は身丈が長くなった。流行小袖の寛文模様は、大柄なモチーフを肩から裾にかけて弧を描くように斜めに配置し余白を大きくとった構図である。背景に、流行の小袖文様を紹介するファッションブックの小袖雛形本や、寛文模様が最上流層から一般の町人女性まで幅広い層に好まれていたためである。

17世紀後半以降は、女物小袖は身丈が長く裾を曳いて着用するようになり帯も同じ頃から次第に幅が広く長くなり装飾的に結ぶようになった。背景に、享保の改革以降度重なる奢侈禁止令が華やかな意匠を敬遠させるひとつの要因になったといえる。



5. 1/2大小袖の制作

5-1 デザイン

『時代衣裳の縫い方 復元品を中心とした日本伝統衣服の構成技法』に掲載された淡藍地花重模様葵紋辻ヶ花染小袖を参考にし2種類の教材を考案した。安土桃山時代の辻ヶ花小袖を参考にしたものをもとに作品A、江戸時代の元禄紅花染小袖を参考にしたものをもとに作品Bとして1/2大で制作した。

生地を選定する際に平安時代に生まれた襲色目の配色技法を参考にした。以下の表4に示す。

表4 襲色目の参考色目

	名称	色目	表	裏	摘要	出典
作品A	青山吹		青	黄	春	桃華薬業
作品B	躑躅		蘇芳	萌黄	冬より春、三十歳まで	色目秘抄

出典：綺陽装束研究所所有職の「かさね色目」HP

5-2 制作過程

まず、淡藍地花重模様葵紋辻ヶ花染小袖の構成技法を参考に、ソーイングペーパーで小袖の予備制作を行い、予備制作をもとにして完成した作品を図2と図3に示す。

作品Aは予備制作した作品と同じ工程で制作を行い、身幅が広く、袖幅が狭いことが特徴である。作品Bは作品Aよりも身幅が狭く、袖幅が広めであることが特徴である。また、美しい紅花染めの世界を素地にして、金糸銀糸による刺繍で盛り上げ豪華絢爛な生地を選定した。

2つの作品を見比べると、身幅や袖幅の違い、時代による豪華さの違いなどがわかる。それは、時代や生活様式、歴史的背景が大きく関わってきていると言える。



図2 作品A



図3 作品B

6. おわりに

本研究では、主要教科から切り離された家庭科と科目間連携の必要性に焦点を当て、時代や歴史的背景によって変化してきた小袖の形態の違いを取り上げて、日本の歴史とつなげていくための教材制作として1/2大の小袖の制作を行った。また、時代によって変化する小袖の形態を表した教材を制作することで、連携科目間に相乗効果が出現し、印象に残りやすいと考えた。

本作品を通し、家庭科と日本史をはじめ様々な教科との横断的視点で教育活動をし、総合的な深い学びへと発展させるきっかけとなれば幸いである。

7. 引用・参考文献

- 1) 富田明美：『新版アパレル構成学 着やすさと美しさを求めて』、朝倉書店
- 2) 増田美子：『日本服飾史』、東京堂出版
- 3) 栗原弘・河村まち：『時代衣裳の縫い方 復元品を中心とした日本伝統衣服の構成技法』、源流社
- 4) 文化庁：日本遺産「山寺と紅花」
<https://yamadera-benibana.jp/bunkazai/元禄紅花染小袖/>